



てきすとぽい杯

VOL

2

<http://text-poi.net/>

# 目次

---

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第二回 募集要項

第二回 審査結果

入賞作品紹介

## 《大賞》

「魔術師の夜」 長介 獲得☆ 4.267

## 《入賞》

「サトウ様」 長谷川圭佑 獲得☆ 3.867

「居眠り」 茶屋 獲得☆ 3.857

「ラララ・フィフティ」 ayamarido 獲得☆ 3.846

〈候補作品〉 ※得票順

「ライアライフ」 犬子蓮木 獲得☆ 3.769

「フライト・フレア」 げん@姐さん 獲得☆ 3.733

「お客様の中に藪医者はいらっしゃいませんか」 ヘリベマルヲ 獲得☆ 3.667

〈そしてすべては始まったで賞〉

「お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか」 山田佳江 獲得☆ 3.600

「共産党書記局長の名前」 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 3.267

「\_\_\_\_\_と%\$\$」 雨森 獲得☆ 3.267

〈Twitter バズ賞〉

「お客様の中にイケダハヤトはいらっしゃいませんか」 代々木犬助 獲得☆ 3.235

「隕石」 丁史ういな 獲得☆ 3.154

〈最速&最多記録更新で賞〉

「お客様の中に」 ひやとい 獲得☆ 3.143

「無念じゃ…」 やぐちけいこ 獲得☆ 3.000

「夢」 ひやとい 獲得☆ 2.667

「ピー」 しゃん 獲得☆ 2.643

「ごめんなさい」 ひやとい 獲得☆ 2.000

〈番外作品〉 ※投稿順

「AKB」 工藤伸一@フサラー団 獲得☆ 3.533 (制限時間後に投稿)

「見知らぬブランドの炭酸水」 肉まん大王 獲得☆ 3.615 (制限時間後に投稿)

〈同じお題を用いた作品〉

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

終わりに

終わりに

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

競うからこそ、生み出されるものがある。

わずか一時間だからこそ、生み出されるものがある。

てきすとぽい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第二回てきすとぽい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/6/>

お題 : 書き出し「お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか」  
空欄に言葉を入れ、本文の冒頭で使用してください。

投稿期間 : 2013年2月16日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年2月17日 0:00 ~ 2013年2月24日 24:00

第二回は、「てきすとぽい始動一周年記念」と銘打っての募集となりましたが、19もの魅力的な作品をお寄せいただきました。

## 第二回募集要項

---

### 【投稿について】

投稿期間：

2月16日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/6/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

### 【審査について】

審査期間：

2月17日（日）0時 ～ 2月24日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

## 第二回審査結果

---

### 【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.267

「魔術師の夜」 長介

<http://text-poi.net/vote/6/11/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:29 最終更新: 2013.02.16 23:38

2位 ☆ 3.867

「サトウ様」 長谷川圭佑

<http://text-poi.net/vote/6/13/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:30 最終更新: 2013.02.16 23:42

3位 ☆ 3.857

「居眠り」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/6/4/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:11

4位 ☆ 3.846

「ラララ・フィフティ」 ayamarido

<http://text-poi.net/vote/6/12/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:30 最終更新: 2013.02.16 23:46

5位 ☆ 3.769

「ライアライフ」 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/6/8/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:24

6位 ☆ 3.733

「フライト・フレア」 げん@姐さん

<http://text-poi.net/vote/6/16/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:36 最終更新: 2013.02.16 23:43

7位 ☆ 3.667

「お客様の中に藪医者はいらっしゃいませんか」 ヘリベマルヲ

<http://text-poi.net/vote/6/9/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:28 最終更新: 2013.02.16 23:31

(番外) ☆ 3.615

「見知らぬブランドの炭酸水」 肉まん大王

<http://text-poi.net/vote/6/19/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:59

8位 ☆ 3.600

「お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか」 山田佳江

<http://text-poi.net/vote/6/17/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:42

(番外) ☆ 3.533

「AKB」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/6/18/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:57

9位 ☆ 3.267

「共産党書記局長の名前」 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/6/3/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:07

10位 ☆ 3.267

「\_\_\_\_\_と%\$\$\$」 雨森

<http://text-poi.net/vote/6/15/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:34 最終更新: 2013.02.16 23:44

11位 ☆ 3.235

「お客様の中にイケダハヤトはいらっしゃいませんか」 代々木犬助

<http://text-poi.net/vote/6/7/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:21 最終更新: 2013.02.16 23:29

12位 ☆ 3.154

「隕石」 丁史ういな

<http://text-poi.net/vote/6/10/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:28

13位 ☆ 3.143

「お客様の中に」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/6/1/>

投稿時刻: 2013.02.16 22:36

14位 ☆ 3.000

「無念じゃ…」 やぐちけいこ

<http://text-poi.net/vote/6/14/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:33

15位 ☆ 2.667

「夢」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/6/2/>

投稿時刻: 2013.02.16 22:56 最終更新: 2013.02.16 23:01

16位 ☆ 2.643

「ピー」 しゃん

<http://text-poi.net/vote/6/6/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:14

17位 ☆ 2.000

「ごめんなさい」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/6/5/>

投稿時刻: 2013.02.16 23:13

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/6/>



《大賞 1 作品》

---

獲得☆ 4.267

「魔術師の夜」

著：長介

<http://text-poi.net/vote/6/11/>

壇上の魔術師は、何気ない言葉で次々に客を舞台の上へと呼び寄せて……。妖しい空気感と、夜独特の色彩を感じさせる、濃密な作品でした。その完成度の高さは、まさに大賞の貫禄。おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

---

獲得☆ 3.867

「サトウ様」

著：長谷川圭佑

<http://text-poi.net/vote/6/13/>

「お客様の中にサトウ様はいらっしゃいませんか？」  
レンタルビデオを借りに来ただけの青年に繰り返される謎の言葉。  
一気に読ませられる予想もつかない展開が、高い評価を獲得しました。

獲得☆ 3.857

「居眠り」

著：茶屋

<http://text-poi.net/vote/6/4/>

居眠りをしながら電車で揺られ、見た夢とは。  
即興小説ならではの勢いと、計算された構成を併せ持つ、目の離せない作品でした。  
ぜひ、最後の一節まで読んでください。

---

獲得☆ 3.846

「ラララ・フィフティ」

著：ayamarido

<http://text-poi.net/vote/6/12/>

キーワードは、「中二病」。

読み手の期待をきっちり裏切り続ける、読者を飽きさせない作品。  
また、そのお題の使い方に、誰もが驚かされた作品でもありました。

---

### 《特別賞》

《最速&最多記録更新で賞》

「お客様の中に」

著：ひやとい

<http://text-poi.net/vote/6/1/>

他、2 作品

お題発表から、なんとわずか6分での投稿。  
また、時間内に3作品の投稿は、過去のてきすとぼい杯を含め最多でした。

---

### 《Twitter バズ賞》

「お客様の中にイケダハヤトはいらっしゃいませんか」

著：代々木犬助

<http://text-poi.net/vote/6/7/>

WEB で話題の人物が登場するためか、Twitter での感想が桁違いに多い作品でした。

---

### 《そしてすべては始まったで賞》

「お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか」

著：山田佳江

<http://text-poi.net/vote/6/17/>

始動一周年記念てきすとぼい杯として、何とも嬉しい作品でした。

——受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

投稿時刻 : 2013.02.16 23:29

最終更新 : 2013.02.16 23:38

獲得☆ 4.267

《大賞作品》  
魔術師の夜  
長介

「お客様の中にお医者さんはいらっしゃいませんか？」と魔術師が声を張り上げ、ふむふむと居並ぶ私たちを眺め渡したあと「はい、ではそちらの青いスーツの男のかた」と細くて長い指で手招きすると、水色のスーツに赤いネクタイの背広の中年男が照れながら舞台にあがり、トランプを引いたり風船を持たされたり、あざやかなマジックにひゃー！と大仰に驚いたりするのを見ながら、さほど羨ましい気持ちもなく、むしろ医者でなくてよかったと思いながら、私は酸っぱいワインをすすっていた。

「では助手をしてくださった褒美に、貴方を鳩に変えて差し上げましょう！空を飛べますよ。」と魔術師が笑いかけるのに、スーツの男は意外に舞台度胸があるようで、「鳩になったら今よりモテるかもしれません」などとズブい冗談で答えながら、魔術師がかぶせてくるつやつやした大きな布を素直にかぶったが、足元まで布で隠れたと思った瞬間に、その身体は消えて布は床に落ちた。

おお!とどよめく声のなか、布の裾から一羽の鳩がひよこひよここと現れ、その首にはご丁寧にさっきまで男が締めていたのとそっくりな赤いネクタイがぶらさがっている。魔術師がそっと手を差し伸べると、鳩はその手にとまり、手を差し上げるとぱたぱたと飛んで、舞台上の細い鉄骨の上に止まると私たちを見下ろした。

「では次です！お客様の中に、今日柏餅を食べた方はいらっしゃいますか？」と魔術師は声を張り上げ、「おや、三人もいらっしゃる！面白いですね！」とくすくす笑うと誰かを指さし、若い女性が大張り切りで舞台にあがり、踊りださんばかりの勢いで助手をつとめ始める。「わたしも今日柏餅食べてくればよかった！」と連れが小声で嘆くのをまあまあ、とおざなりになだめつつ、チーズをつまみサラミをつまみワインを舐めながら私は舞台をさしたる熱もなく漫然と見ている。やがて女性はやはり布をかぶせられて白ネコに変わり、たたと舞台端の足場を駆け上がると、鉄骨の上に身体を横たえた。

次に呼び出されたのは今日が誕生日の人で上品な老婆だったが、助手をつとめることもなく即座にカエルに変わり、その次は男でも女でもない人という条件でオカマが身をよじらせながら駆け上がり、魔術師にラブコールを送ったあとコウモリに変わった。その次は眼の奥が痛む人、その次は愛を信じていない人で、その条件を聞いたとたん連れは「はい！はい！」と元気よく手を挙げ、即座に指名されて小さく私に手を振りながら舞台に向かっていき、数十分後にはカラスになっていた。私はどんどん酸味を増すワインに

口をつけたまま手のひらをひらひらさせ、次から次へと摩訶不思議な条件で客が呼び出されては消えるのを見続けたが、私にあてはまる条件は何ひとつなく、呑めば呑むほど酔いは醒めてゆくようだった。

いつか魔術師も客も声を発しなくなり、拍手の音は絶えて聴こえなくなっていったのだが、最後に魔術師が、黒く渦巻く影のようなものを一本の葉巻に変えてみせ、ふところからライターを取り出して、ふうっ、と煙を吐くまで、私は舞台にのぼる客が、いつのまにか人間ではない何かになっていることにすら気づかなかった。

「さ、どうぞ。」気だるそうに魔術師は私を招き、私は立ち上がろうとしたがすでに腰は長時間座りっぱなしの痺れと酔いでぐにゃぐにゃになっており、四つん這いになったままのそのそと必死に舞台にのぼり魔術師を見上げたが、魔術師の肩越しには、鉄骨の上に並んで感情のない目で見下ろしてくる生き物たちが見えた。

私は何者でもないのですか、と私は言いかけたがその言葉すら舌先でもつれ、思わず涙ぐむのを魔術師は優しい目で見て、あの光沢のある布をだまって手渡した。よろよろと立ち上がってその布を魔術師にかぶせると、魔術師は一瞬にして姿を消し、布はそのまま床の上にしゃらしゃらと広がった。そのとき、(何者でもないから、魔術師になるのですよ) いう魔術師の最後の囁きがきこえ、私は心の中に光をともしられた気持ちで、ああそうだ私が後を継ぐのだと思うとうれしくて踊り出しそうで、手始めに連れたちを元に戻さなきゃと上を見上げると、あれほどたくさんいた生き物たちの姿は掻き消えていて、客席を見やるとそこにはただ暗闇が広がるばかりだった。

それから私は、魔術師として、客が来るのを待ち続けているのだが、客席の闇はいっかな変わりばえもなく、何かの気配がすることすらない。もしかしたら私は騙されたのかもしれない、私は魔術師ではないのかもしれない、と誰もいない薄緑色のライトに照らされた舞台上で布を振りつつ考えると気が狂いそうになる時もある。だがもう、私は自分が誰だったのかすら、うまく思い出せないのだ。

《入賞作品》  
サトウ様  
長谷川圭佑

お客様の中に、サトウ様はいらっしゃいませんか？  
青年は、ワケが分からなかった。

青年は、いつも利用しているレンタルビデオ店に映画を借りにきていた。あわせて三本。古いものと、そこそこ新しいものと、今日出たばかりの新作をそれぞれ一本ずつ。週末、彼は自宅でそれらの映画を観る以外には予定が無かった。ちなみに、“そういう”ビデオは借りなかった。彼はいつも、それはそれで、また別の店で借りることにしているのだった。

「会員証はお持ちですか？」

彼は、毎度聞かされるその質問に、うんざりしていた。彼は、心のせまい、寂しい青年だった。だが、同時に小心者でもあった。

「はい、持っています」彼はいつも、律儀に答えながら会員証を出す。

「新作のご利用泊数はいかがなさいますか？」

「一泊で」

「スタンプカードはお持ちですか？」

「いいえ、持っていません」

「無料でお作り出来ますが、いかがなさいますか？」

「いいえ、結構です」

「では、お客様の中にサトウ様はいらっしゃいませんか？」

「……え？」

青年は、聞き間違いだと思った。青年の名前は、ハセガワだった。

「……え、いいえ」それにしても、もし自分がサトウだったとして、〈――の中にサトウは――〉とはどういう意味なんだろう？ 青年は不思議に思いながらも、何とかそう答えた。

「えッ？」レジの女性店員は、予想外の答えに驚いたように、言った。「サトウ様、いらっしゃらないんですか？ お客様の中に……」

青年は、わけがわからなかった。

「えッ……いえ、いませんよ。ちなみに、ぼくはハセガワですが……」

女性店員の顔が、みるみる青ざめていく。彼女は、あわてて、奥へと引っ込んだ。奥からは何か、男性の怒鳴り声が聞こえてきた。ほどなくして、スキンヘッドのいかつい、エプロンのひどく似合わない男が出てきた。

「お客さん、ちょっとこっちへ」そう言われて腕をつかまれ、店の奥へと引っ張っていかれた。

「どういうことなんです？ お客様の中に、サトウ様がいらっしゃらないって」

「えッ、いえ、どういうことって……ぼくはハセガワで、サトウ様なんて……」

「ちょっと、警察呼びます」

「えッ？ ちょっと待ってください。どういうことなんですか？ わけがわかりませんよ。説明してください」

しかし、青年の訴えは聞き入れられなかった。すぐに警官が二人、やって来た。

「きみ、本当にサトウ様がいらっしゃらないの？ 君のなか」

青年は、先ほどと同じように否定を繰り返した。

二人の警官は、参ったな、というような顔を見合わせながら、何か小声で相談しあっていた。

やがて、一人の警官が意を決したように青年に手錠をかけ、もう一人が、彼の腰に縄をかけた。

そうして、青年は連れて行かれた。

青年が連れて行かれた先は、意外にも、取調室ではなく、病院だった。

「たぶんね、記憶違いだと思うんだ。思い込みっていうかね。きみが自分の中にサトウ様がいないと言ってるのは」

白衣の若い男が、青年の顔をのぞきこむようにして言った。彼は、担架に縛り付けられ、身動きがとれないようにされていた。

それから、青年は血を取られたり、脈をはかられたり、レントゲンを撮られたりした。

すべての検査が終わって、白衣の男たちが何人か集まって、縛りつけられた青年の横で、レントゲン写真を見ながら、話し合っていた。

「おかしいな……本当にいないようだよ」

「いや、……ここだ。背骨の影にぴったり重なってしまっていたんだ」

「いやあ、慌てたなあ、サトウ様、本当にいなくなってしまったのかと思った」

彼らは安心したように、談笑していた。

突然、青年の腹部に、激痛が走った。白衣の男たちの間にどよめきが起こった。痛みは激しくなっていた。内側から、何かが突き破って出てくるようだった。青年は、意識を失った。

彼の身体は、担架に乗せられたまま、別の部屋へ移動させられた。看護師たちが集まって来た。白衣の男たちも青緑色の服に着替え、部屋へ駆け込んだ。

やがて、青年の腹を内側から突き破って、何か、細長い身体の生物が出てきた。

男たちのうちの一人が言った。

「よかった。サトウ様は無事だった」

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

《入賞作品》  
居眠り  
茶屋

お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？

まどろみから覚める数瞬間、そんな言葉を耳にしたような気がする。まだ意識ははっきりしないが、車内は騒然としている様子だ。

いったい何が起きたのかは分からないが、私の安眠を邪魔するとは甚だ無礼ではないか。この電車の中での安眠を心待ちにして電車に乗り、電車の安眠がために居酒屋で日本酒を一献やってきたのだ。

しかしながら覚めてしまったものは仕方がない。いささか不本意ながら目をこすって目をさますことにする。ガヤガヤと人の声が入り交じっていてイマイチ状況は把握できぬが何やらただならぬことが起きている様子である。ただならぬ様子ではあるが電車は止まっておらず、窓の外の景色は早々と移り変わっていく。ただならぬことが起こっているといっても私のあずかり知らぬところである。

不満気に窓の外を見ているのだが、どうにも周りが煩くてしょうがない。風呂敷の中から携帯音楽プレーヤーを取り出して、イヤホンに耳にはめる。いつもよりも音量を大きくして、外界からの振動を鼓膜に伝わらんようにしてやる。

無然とした面持ちの己が窓に映っている。なんとも不細工な顔だが仕方あるまい。生まれてからずっとの付き合いである。慣れたものだ。そんな見慣れた自分の顔を仔細に観察しているうちに再びまどろみの中へと飲み込まれていった。

お客様の中に爆弾処理班の方はいらっしゃいませんか？

そんなものがあるわけがない。

荒唐無稽なそのアナウンスはそれが夢であろうことを告げている。

夢を夢であると自覚することは滅多にないが、今日はそれをしてしまったらしい。夢のなかで夢と気付くなど夢の趣もわびさびもあったものではないが、気づいてしまったものをいまさら忘れるなどという技術は身につけておらず、夢のなかではもはや眠気が消え去ってしまっている。

誰も挙手せぬものだから、ついつい挙手してしまった。

これが夢ならば、とっとと爆弾なりを爆発させてしまえば別の夢に移行できるわけであり、さすれば夢と気づかぬ夢を見ることが出来るやも知れぬのだ。

車掌だか客室乗務員だかわからぬ輩に案内されて、行った先は御不浄、便座を上げて用をたすところにただならぬ雰囲気をもった爆弾が設置されていた。車掌の言う話にはたった今連絡が入り、トイレに爆



弾が設置されていること、列車が停まったら爆発する仕掛けになっていることが知らされたのだという。

なんとも物騒な世の中である。これではうかうか車中で腹痛も起こせぬ。

物売りの女がなにやら道具をいろいろと持ってきていて、何を使うのかと問うてきたが、それを手で制して、腰に下げた刀を抜いた。

爆弾なぞ、一刀両断にたたっ斬るしまえばよいのだ。

ええい！

お客様の中に正義の味方の方はいらっしゃいませんか？

また、夢のなかである。

どうやら爆弾は爆発したらしいが、別の夢のなかでまで夢と気づいてしまったらしい。

正義の味方など、今度は先程よりも甚だふざけた夢である。ふざけていると憤慨して文句でも垂れてやろうと立ち上がってみると、奇妙な姿をした怪人が乗客の令嬢を人質にとって何やら喚いているではないか。秘密結社のこうこうこういうもので、目的はこうこうこういうことであり、その崇高な目的のためこうこうこういうものがこうこうこういう方法で戦っているという口上である。涙ぐましい努力であるのはわかるが、秘密結社の構成員たるものが堂々と名を名乗るなど馬鹿にも程がある。いわゆるゆとり世代というやつであろう。秘密結社も毎年新入社員を迎え入れるだけの資金が潤沢にあるようだ。

さて、私が立ち上がってしまったものだから、その怪人に目をつけられてしまった。

怪人は怒り狂ったように、なにやら言語ならぬ言語を吐き散らすと、長い触手をしならせて私の方に打ち出してきた。

すんでのところでそいつをかわすと隣席の乗客をひとつ飛びに乗り越え、中央の廊下を一気に駆けた。

二手、三手と次々と繰り出される攻撃をかわしては、刀で切り結び、懐まで一気に踏み込んで入ると脇差を抜き放ち、怪人の人質を押さえていない方の手を斬り、もう一方の刀で足を両断した。

怪人の断末を聞き、返り血を浴びながら私は次の夢は気づかぬようにと願い、怪人を一刀両断に叩ききった。

お客様の中に魔法少女の方はいらっしゃいませんか？

私は天井のスピーカーを一刀両断に叩ききった。

お客様の中にお侍様はいらっしゃいませんか？

これは夢であろうか、現実であろうか？

もはや幾度、客の中に何者かを探す声を聞けばよいのだろうか。

私はその声を聞くたびに何かを叩き斬り、夢から逃れようと懸命にもがくののだが、どうもそれが悪い方向に行っているような気がする。

もはや、その声を無視すれば良いのだろうが、今度ばかりはそうもいかぬ様子である。

今度は電車の中でない。

目をさましてみれば、なにやら屋敷の庭の様子である。

はて？と思って首をかしげ、あたりの様子を見て、また別の方に首を傾げる。

お客様の中にお侍様はいらっしゃいませんか？

どこからともなく聞こえてくるその声は、私を促している様子でもある。

仕方なく、「私が侍だ！」と声をあげる。すると屋敷の障子の奥から声がした。

「曲者じゃ！であえ！であえ！」

今度もまた立つ斬らねばならぬようである。

お客様の中に夢を見ている方はいらっしゃいませんか？

それは私のことである。

私は夢を見ているのだ。

とびきり面倒で、厄介な夢を。

私だ！

と言おうとするのだが、どうにも声が出ぬ。

何やら、嫌な予感がする。

必死になって叫ぼうとするが、やはり声は出ない。

いらっしゃらないようですね。

いや、いる。ここに、私が。

では、出発いたします。

待て、置いて行かないでくれ。

頼む。

待ってくれ！

お客様の中に小説を書いているはいらっしゃいませんか？

いらっしゃいませんね。

では、出発いたします。

投稿時刻 : 2013.02.16 23:30

最終更新 : 2013.02.16 23:46

獲得☆ 3.846

《入賞作品》  
ラララ・フィフティ  
ayamarido

「お客様の中二病指数は329です。これは中二病としては一般的なレベルですので、どうぞご安心ください」

セラピストの笑顔に安堵して、田崎泰友は中二病ショップを後にした。

中二病、中二病。

泰友は自分がその状態になっていることを自覚して以来、恥ずかしく、またいつ人に知られるのではと恐ろしく、そうしてついに意を決して、インターネットで調べた「中二病ショップ・専門家による中二病指数診断」というものを受けてみたのである。

その結果、

「普通レベルですよ」

と言われた。

これは、たとえば、退屈な午後一番の教室に唐突にテロリストが現れるとか、あるいは放課後、体内にわき起こるすさまじい力の奔流が、光の波動となって黒板を破壊するだとか、そういう理不尽な空想を相当程度、現実感を持って日常的に妄想しているということで、それ自体は、

「別におかしなことではありませんよ。みんな妄想していますからね」

と、セラピストが言った通りであろう。

が、そうだとすると、それで彼は安心できるのだろうか。

みんなが通る道だから、みんなが中二病を患っているのですよ——と言われたからといって、泰友が安心して良い理由にはならない。

なぜなら泰友は、この春には五十歳になるのだから。

五十歳の中二病。

なるほど、彼の職業が作家だとか、漫画家とかであれば、この年まで中二病を維持できるというのは、かえってすばらしいことであろう。だが彼は、しがない、といっちはこれまでの人生がむなしくなるが、実

際、日々無能な公務員なのである。

日々、決りきった作業を右から左に流して、判を押すだけ。

課長補佐の職位にあるから、毎月振り込まれる給料は業務内容に比すれば悪くないが、悪くないだけで、月毎、年毎の増減があるわけでもなく、そこに何の楽しみもない。男心が勇み立つようなプロジェクトが舞い込むこともないし、とって、仕事時間中に株のデイトレードに心血を注げるほど暇でもない。決まり切った仕事は、一日七時間四十五分きっちりあって、余計なことを考えずに済むかわり、思考を遊ばせることはない。

と、そういう典型的無人格的な存在が中二病だというのは、何とも恥ずかしいというか、恐ろしいというか、馬鹿らしいことである。

数日して。

泰友は、何となく悶々としながら、いつものデスクでポンポン判を押していたが、ふと、窓口に来た、建設業者めいた男が、

「田崎課長補佐はいらっしゃいませんか」

と言ったことに気付いた。

すぐに、受付担当のパートがこちらを振り返って、

「あの、課長補佐――」

と呼ぶ。

それで窓口に来ていた業者の男と目が遭ったが、その刹那、

あれは、テロリストだ――。

泰友は直感し、椅子を蹴って立ち上がるなり、

「みんな、伏せろ！」

大音声で叫んでいた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

響き渡った泰友の大声に、当然、役所内は静寂というのもおろか、ぽかーんとした。

十数人の一般市民と、何十という周辺部署の人間すべての目が、彼を、信じられない物体であると見てい

た。

いうまでもなく、誰も伏せていない。

というか、田崎泰友自身、伏せるのを忘れている。

ちなみに、泰友の職場は公共施設であり、稀に、知的欠陥を有する人が現れ、わけのわからぬことを叫んで警備員につまみ出されることもある。が、だからといって、課長補佐の五十歳男が、わけのわからぬことを、しかも、飛んでもなく大きな声で叫んだことを無視できる者はいなかった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

無数の沈黙。

だが、どうしたんですか——と、聞く者は、まだいない。

泰友の声があまりに確信的だったし、目も、真剣そのものだったからだ。それは今も同じである。

「あ……」

と、その時、一人の若いというか幼い職員が、がたがたと音を立てて、自分のデスクの下へ身を潜ませた。伏せる、と上司が命じたことに、ようやく反応したのだ。

その刹那だった。

「もはや手遅れじゃあ！」

叫んだのは、カウンターの向う、業者の男だった。

ブチッ、と、首筋から伸びていた紐を引きちぎるなり、

「おおッ！」

叫びながらカウンターに飛び上がり、仁王立ちしたまま、

「厭離穢土欣求浄土じゃあ！」

どかーん！

わけのわからぬ爆死によって職員一般市民を大勢巻き込み、その役所を崩壊させたのであった。

ちなみに、あとで調べてみると、泰友の声に反応してデスクへ潜り込んだ若い男は、たまたま「職業体験」により役所で働いていた、市内の中学二年生の男子生徒だったということである。彼は、無傷だった。

(了)

## ライアライフ

犬子蓮木

「お客様の中に嘘はいらっしゃいませんか」

そんな言葉が私の頭に浮かんできた。私の頭の中が嘘ばかりだったので、どうしても笑いだしたくなる。

ふふ、と笑っていると隣に座っていた父が不思議そうな顔を、ひとつ咳払いをよこした。

私は気を引き締め直して、言葉を作る。

「とても素晴らしいお仕事をされているのですね」向かいの男性に微笑む。

今日の晴れ日は、お見合いの日。どんなに天気がいいとしても高級ホテルのレストランで、歪んだ微笑みをかえさなくてはいけない。

彼は、外務省のキャリアでいずれはどこかの国の大使となるらしい人だった。

私は、彼の将来のような父を持ち、母のような妻となる運命を持って生まれてきた。

今日のおみあいの成功は、ここに座っている人、すべての悲願であるらしい。

「都子さんのご趣味はどのようなものでしょうか？」あちら側の人間が言う。彼の母親だ。

趣味だって？

そんなものをまともに答えられない人間だっているだろう。私には趣味と言えるほどまっとうに好きなものがない。何かを好きになりそうになるとみんな取り上げられて、代わりにしたくもない上品な習い事を押し付けられてきた。

「映画鑑賞を少々。フランスのものが素晴らしく思います」

しいて言えば嘘をつくことかな。趣味なんて。

「ほお、フランス」父が唸る。「奇遇ですな。木口君は、向こうでは映画など観られるのかな？」

お相手の彼は、現在、フランスの大使館に赴任している。そしてたまの長期休暇で帰ってくれば今日のお見合いである。楽しいのだろうか。

「ええ、向こうの映画は素晴らしいものばかりです」

「そちらの映画館で見たいものです。もうすぐギェルベスタ監督の新しいものが上映されるとか」

私は上品に微笑んだ。ちなみにそんな名前の監督はたぶん存在しない。

「是非、いらしてください」

「一度、向こうの向こうの雰囲気味わっておくのものいいだろうな。彼の働きぶりも見せて貰うとして」

「それは緊張して仕事に支障がでてしまいそうです」

一同が笑った。

何が楽しいかはよくわからない。

「ですが、ゆくゆくは一緒になれるわけですからね。太郎さんもがんばりませんと」

「話を進めすぎです」

彼が慌てて母親の言葉をさえぎった。一同はまた笑いにつつまれた。

私は恥じらう乙女のごとく頬を染める。身をすくめて、首をかしげて、つづく言葉を選び出す。基準はなんだろう。誰のためだろう。私の体は。頭は。言葉は。存在は。ただ決められたゴールへと進む、おもちゃの歩兵でしかない。

「いいお話は、ぜひ進めていただきたく思います」

お見合いは、つつがなく終わった。向こうの彼が私を気に入るかという問題ではない。私が彼を気に入るかという問題でもない。

よほど壊れた人間でもなければセッティングされた瞬間に結果も決まっていた。

家柄という属性があるから。

好きでもない男と結婚して、好きでもない国で暮らして、好きでもない彼を立てて生きていく。それは豪勢でうらやむ人ができるような暮らしではあるのだろう。幸せでもあるのだろう。別に彼が悪い人にも見えない。見た目はかっこよくもある。頭だっていいはずだ。

だけど、きっと、一生、嘘をつくことになる。これでよかったんだって、自分に嘘を。

「お客様の中に嘘はいらっしゃいませんか」

そんなことを言われても私は黙って微笑んで生きていく。

手をあげたりなんかすることはない。

<了>



## フライト・フレア

げん@姐さん

「お客様の中に医療従事者の方はいらっしゃいませんか」

そんな台詞が聞こえてきたのは、離陸からほどなくして飲み物がサービスされている頃だった。

乗客の中からは言うが早いがちらほらと手が上がっており、客室乗務員が「こちらへ」と前方へ誘導している。

しかし…何かがおかしい。

急病人であれば、医師を探すだろう。

医療従事者は医師だけではない。

医師、歯科医師、看護師、助産師、薬剤師、放射線技師、理学療法士、作業療法士…挙げればキリがない。

広く捉えれば医療事務も、病院の清掃員も医療従事者だろう。

はて、医療従事者とはいかに。

首を傾げながらも、自らも医療従事者だと挙手する人が跡を絶たない。

離陸時はほぼ満席に近かったエコノミークラスに、空席が目立ちはじめた。

と、先ほどアナウンスした客室乗務員が挙手した乗客を案内し終えたのか戻ってきた。

そして「お騒がせいたしました。ご協力ありがとうございました。」と言い、何事もなかったかのように飲み物のサーブを再開した。

非日常の緊張にさらされていた客席にも、ほっとした空気が流れはじめた。

…実は、他でもない私も医療従事者の端くれなのだが、こうなると完全に遅れてしまった。

今さら私もですとは言えない。

少々の罪悪感は覚えたが、あんなに大勢の医療従事者が集まったのだ。十分すぎるくらいだろう。

そう結論づけて後ろめたさをサーブされたホットコーヒーで流し込み、寝てしまった。

「お客様、お客様、起きてください」

遠慮がちな声に意識が浮上する。

意外と近い場所に、さっきの客室乗務員の顔があった。

もう着陸かと思いきや、まだそんな時間ではないことに気づく。

若干むっとして無言で睨むと、彼女は申し訳なさそうに言った。

「お嬢様がお呼びなのです。いらしてください」

…お嬢様？

意味が分からなかったが、寝起きで判断力が低下していたのか意義を唱える前に立っていた。

そしてふと目に入った景色にぎょっとした。

乗客が一人も居ないのだ。

一体何が起こったのだ。

改めて客室乗務員の顔を見るが、彼女は絶対に目を合わせようとしない。

「お客様。わたくしを助けるとして。どうか今すぐにでも」

何時の間にか周りを客室乗務員たちに囲まれており、半ば押されるように歩き出した。

エコノミークラスにあればいた乗客は一体どこに消えたのか。恐怖で足がもつれる。

ビジネスクラスにさしかかる頃、やっと人の気配を感じ、ほっとした。

が、このビジネスクラス、見渡す限り女性である。何かのツアーだろうか。

客室乗務員はそこも足早に通り過ぎると、ファーストクラスへ私を誘った。

「こちらにお嬢様がいらっしゃいます」

恐る恐る中に入ると、一人の女性が座っていた。

私の顔を見るなり、その顔がぱっと花が綻ぶように輝いた。

「ああやっと会えた」

「空港であなたを見かけて一目惚れだったの

急遽この便のファーストとビジネスは買取ったんだけど、エコノミーは無理で…

いきなり直接話すなんて恥ずかしいじゃない？

預けたスーツケースの中に白衣と医学書が入ってたから医療従事者だと思って。

それで呼ばせたのに、あなた全然来ないんだもん。

くる人くる人みーんな外れで疲れちゃった。

女のひとは全員おわびにビジネスにうつってもらって…

ねえあなたに会うためにわたしがどれだけ努力したか分かる？

あなたをこんなに好きなのって世界でわたしだけだと思う。

そんなわたしをあなたも当然好きよね？わたしたち両思いだわ」

一気にまくしたてられ、思考が追いつかない。

スーツケース、開けた？

客席を買取った？

エコノミーにいた乗客のうち、女性はビジネスクラスへ

では男性は…？

そして、先ほどから感じるこの匂い。

職場でたまに感じる匂いだ。そう、血の匂い。

むせるような薔薇の香りに、微かに血の匂いが交じる。

その匂いを纏い、微笑む彼女は壮絶なまでに美しい。

真っ赤なルージュをひいたくちびるが言葉を紡ぐ

「さあ参りましょう？旦那様」

ああ、もうすぐ着陸か。

## お客様の中に藪医者はいらっしゃいませんか

ヘリベマルヲ

「お客様の中に悪霊はいらっしゃいませんか」

おれは医者顔をまじまじと見つめた。

医者はたっぶり一分間はおれの顔を見かえしたのち、カルテに何か書きこんだ。

「いま、なんと……」

「お客様の中に悪霊はいらっしゃいませんか」

「悪霊？」

医者は何やらいいたげに目を細めた。それからまた何かカルテに書いた。

「さっきもいいましたよね。悪霊がどうか」

「既視感ですね。よくありますか？」

「あんたがいったんでしょう。悪霊がどうか。二度も」

医者はしたり顔でうなずいた。「幻聴ですね」カルテに記入した。

「ちょっ……」おれは思わず声を荒げた。「おれはただ、眠れる薬をもらいにきただけです」

「何に使うんです？」

「何って……説明したじゃないですか。眠れないんですよ。ほかにどんな用途があるっていうんです」

「不眠ね」医者は不満げだった。「いつから？」

「二週間くらいずっとですよ。不眠症なんだ。さっさと薬をよこせよ」

「診断するのはわたしです。患者のいうままに処方するわけにはいかない」

「ははあん」今度はおれが目を細める番だった。「わかったぞ。先生、おれを統合失調症にしたいんですよ」

「わたしはあなたの話を聞いているだけです」

おれは短く笑った。「聞いてやしないじゃないか。一方的に診断を押しつけるだけだ。――あっ、いま被害妄想だと思っただろう」

医者はカルテに書きながらたずねた。「どうしてそう思われるんです？」ばかにした態度だ。

「おれは心が読めるんですよ。高い薬を売りつけようって魂胆だな。不眠症じゃ金にならないから。ちくしょう、ひとを気ちがい扱いしやがって」

「お薬を出しておきます。次の方」

処方箋をもらい、勘定をすませて病院を出た。調剤薬局まで歩きながらおれは声にだして独りごちた。

「あの藪医者め。おぼえてろ」

ベテルギウス人がテレパシーで通信してきた。「そうだ。殺せ。やつは世界の波動を乱す」  
「そうとも。殺してやる」おれは CIA に盗聴されないよう小声でつぶやき、街中でおれを狙う監視カメラを避けながら、尾行をまくために走りだした。

《そしてすべては始まったで賞》  
お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか  
山田佳江

「お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか」

キャビンアテンダントの緊迫した声に、私は耳を疑う。

「お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか、お客様の中に小説家様はいらっしゃいませんか！」

飛行機は羽田空港を出発したばかりだった。

「おい」

夫がひじで、私のことをつつく。

「なに？」

「小説家って」

夫と私のやりとりを目ざとく見つけたキャビンアテンダントが、私たちのそばに駆け寄ってくる。

「お客様は小説家様でしょうか」

「小説家というほどのものでは」

「執筆歴はありますか？」

キャビンアテンダントは片膝をついて、通路側の席に座る私に話かける。

「十年くらい小説を書き続けてますよ。俺は読んだことないけど」

他人ごとのように言い放つ夫を睨みつける。それからキャビンアテンダントに向き直り、

「小説家志望です。なにが起こったんですか」

と、覚悟を決めて尋ねた。

私は一人でコックピットに通された。

「これは？」

「オンラインで地上に繋がっているようなのです」

こじ開けられた計器の内側に、スマートフォンが接続されている。

「管制塔から連絡がありました。この航空機は一時間以内に爆破されます」

操縦席に座った機長が、冷静な声で私に告げる。

「これを見て下さい」

私はスマートフォンを覗きこむ。

『福岡空港到着までに、お題に沿った小説を書いて投稿。星五つの評価を得ることが、爆発の解除キーとなる。まもなくお題発表』

「福岡空港到着までに？」

「あと一時間二十分です」

機長は私に説明する。このスマートフォンはインターネットを経由し、どこぞの小説投稿サイトに繋がっているらしい。私がここに小説を書き、そのサイトを閲覧しただれかが評価を下す。星五つに満たなければ、計器に埋め込まれた爆弾が爆発する。

「これ、外せないんですか？」

「接続を解除すると爆発します」

スマートフォンの画面が自動更新する。

『お題：三題「振動」「初夢」「ポップコーン」これらの言葉を、タイトルまたは本文で使用してください』

「あっ、これ適当に書いて、管制塔の人に星五つをつけて貰ったらいいじゃないですか！」

名案だと思ったのに、キャビンアテンダントとパイロットに厳しく睨まれる。

「ここにいる百人以上の命がかかっているんですよ！」

「お願いします！」

私がこれを書かなければ、この飛行機は爆発する。いまいちリアリティがないけど。

「あと一時間十五分」

実家に預けてきた子どもたちのことを思う。それから客席にいる夫のことを。

「振動、初夢、ポップコーン……」

私はスマートフォンの画面にタッチする。それから小さく息を吐いて、『作品を投稿する』ボタンを押した。

## 共産党書記局長の名前

ひこ・ひこたろう

「お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんか」

車掌の声が大きく響く。遊説旅行に向かう共産党の委員長が、東京駅の新幹線ホームで何者かに狙撃されたのであった。頭から血を流し、ピクリとも動かない委員長の姿を見てしまった多くの乗客は、目の前の人物の死を確信せずにはいられなかった。総選挙の投票を翌日に控えた朝の惨事であった。

そもそも今回の総選挙は、安倍内閣の圧倒的な支持に支えられ自民党の楽勝ムードだった。自民党が単独で3分の2以上の議席、すなわち320議席を確保するのは確実視されていた。先の参議院での圧勝に引き続き、ここでも勝てば安倍総理の悲願である憲法改正が現実的となる。少なくとも、憲法改正の手続き(96条)の改正は、選挙直後にも早急に行われるとの見通しであった。

護憲を掲げる共産党は、健気にも全選挙区に候補を立て、これに挑む体勢をとったが、いつものように供託金を没収されるだけの、虚しい戦いになることが予想された。中国は選挙の公示に先立って尖閣諸島周辺の領海を度々侵犯したが、それはかえって安倍内閣への支持を固めただけであった。

しかし、共産党への追い風となるような事件は立て続けに起きた。まず、大島優子が栃木一区から立候補、所属政党はまさかの共産党。寿司屋を営む実父が民商のメンバであったことは、週刊文春でも嗅ぎつけることはできなかったようだ。相手は自民党の船田元。「AKBの恋愛は解禁しても、船田元の不倫は禁止したい！」と応援に駆けつけた前田敦子は言っていた。キンタローまでやってきて、「期日前フライング投票ゲット！」などと、わけのわからないことを口走りながらも投票を呼びかけた。

次の事件は投票の二日前に起きた。朝鮮半島非武装地帯で鶴の研究を行っていた日米の学者らが、北朝鮮の発砲により死傷。韓国軍が応戦したため、緊張が高まる。HK Tの森保まどかは、「自衛隊が朝鮮での戦争に巻き込まれるのはイヤ」とググタスに綴った。この率直な意見はあちこちに転載され共感を呼んだ。北朝鮮は軍事境界線を一時的に突破。ソウルなどの各地で爆弾テロが発生。そして気になることに、竹島にある韓国警備隊基地の通信が相当時間途絶えていることが、防衛省の消息筋の口から語られた。竹島で韓国と北朝鮮が衝突でもしたのか？

そして最後の事件が共産党委員長の暗殺だった。現場から素早く姿を消した犯人は、右翼の跳ねっ返りと



予想されたが、詳細は不明。誰かがスマホで撮影した狙撃直後の映像は衝撃的で、警備に当たっていた警視庁の対応のまずさが指摘された。共産党は急遽、書記局長が選挙の陣頭指揮をとったものの、マスコミは以前にも増して大島優子を共産党の顔として扱うようになる。

選挙の投票率は80%を超えと見込まれ、史上空前の激戦であった。大島優子の当選は早々と伝えられたが、その他の選挙区は自共伯仲。関東ブロックの比例区で最初に当選が決まったのは、何と共産党の候補者の方が先、という激戦ぶりだった。自民党に投票すれば戦争に巻き込まれる、との国民の懸念や、共産党委員長暗殺による同情票と右翼離れが今回の選挙を左右してしまったようだ。

国民が固唾を呑んで開票速報を見守る中、陸上自衛隊の一部がクーデターの動きを見せた。共産党政権の誕生が国防上危険との認識からである。警視庁は今回も動かなかった。スカイツリーは真っ先に制圧され、そのエリアではテレビがまったく見られなくなった。テレビ局や新聞社も例外ではない。制服の自衛官がテレビ局に乗り込む姿は、生々しい映像として地方には届けられた。もはや開票速報どころの騒ぎではなかった。大島優子はともかく、安倍総理すら所在不明となった。首謀者は誰なのか、次の総理は誰になるのか、いや、日本の権力体制はこれからいったいどうなってしまうのか？

その時である。森保まどかがまたしてもググタスに書き込んだ。

「竹島で北朝鮮と韓国が戦闘をしたらしいけど、どちらが勝っても『独島を守ったのは俺だ』と言わせないために、海上自衛隊は両軍を撃破したんでしょ？ 今や竹島は海上自衛隊の制圧化にある。なのにそんな海上自衛隊は、今回の危機に対して目をつむっていられるのかしら？ 本当の敵は東京にいます。海上自衛隊のみなさん、反乱を起こした部隊と戦ってください。戦争に巻き込まれるのはイヤだけど、戦わないのはもっとイヤ！」

とある潜水艦の艦長は、この文章を読んで一言つぶやいた。「制圧化？ 『化』の字が違う」

かくして「化の字文書」と名づけられたこの檄文は、海上自衛隊を奮い立たせたばかりでなく、国民は竹島を巡る彼らの活躍をも知らされることとなった。また、森保まどかがAKBグループであることから、大島優子も当然海上自衛隊に期待を寄せているという憶測がなされた。

その夜のうちに、横須賀基地の全艦が電灯艦飾で東京湾に姿を現した。やる気満々の海上自衛隊を前に、反乱軍は徐々に撤収を始めた。陸上部隊だけでは、海上自衛隊には勝てない、との認識は間違っていない。テレビは復活し、軟禁状態を解かれた安倍総理や大島優子らが、画面を通して冷静な対応と秩序の回復を求めた。そして、開票の結果も遅ればせながら伝えられたのであった。

自民党222議席、共産党222議席……。まさに死闘の名に相応しい結果であった。

翌日、自共連立内閣の発表がなされ、安倍総理は続投、共産党書記局長は副総理。大島優子の少子化対策担当相としての入閣も決まった。クーデターの首謀者はただちに逮捕され、多くの隊員は命令に従っただけであると不問にされた。特筆すべきなのは憲法秩序の回復に大きく貢献した森保まどかの処遇である。彼女は女子高生ながら憲法の番人として最高裁判事に任命されることとなった。

大島優子少子化対策担当大臣が、森保まどか最高裁判事に聞いた。

「どうして竹島防衛行動のことを知ったの？ ずっと極秘にされていたのに」

「2ちゃんねるが荒らされていたの」森保まどかが答えた。「海上自衛隊は泥棒だって」

大島優子は溜息をついた。確かに韓国人には日本の秘密を守る義理なんてない。

「秘密といえば」森保まどか最高裁判事が質問した。「共産党の書記局長の名前って秘密なんですか？」

「そんなことないわ。ただ知らないだけなの」と大島優子が呆れたように答えた。「作者も、これを読んでいるみんなも」

\_\_\_\_\_と%\$\$\$  
雨森

『お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？』

そのアナウンスを聞いた時、思わず俺は失笑してしまった。

「なんか、旅客機とかで急病人でも出たみたいなセリフだな」

そう言って彼女の同意を求めたくて隣を見やると俺とは違い彼女の方は妙に深刻な表情をしていた。

「……今、あの人なんて言ったの？」

「さあ、ナントカはいませんかって」

「ナントカって？」

「知らないよ」

俺のその言葉を聞く前に彼女はアナウンスの源である女性店員へと歩み寄っていた。

ここは日曜日のデパ地下であって空中を飛ぶ旅客機とは訳が違う。急病人やけが人程度なら救急車やパトカーを呼べば済む話だ。

『お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？』

また例のアナウンスだ。いったい何を必死になっているのだろう。またしても肝心の部分を聴きそこねた俺は彼女の後ろ姿を見つけるとやれやれといった態を装い近づいた。ちょっとした好奇心に刺激されてもいたがわざわざ彼女に告げる事もない。

「何て言ってるか分かった？」

そう言って彼女の顔を伺って見たが、その表情はいつもと明らかに違ったものだった。頬は蒼白になり、かちかちと歯の鳴る音が聴こえる。

『お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？』

三度のアナウンスで俺はようやく違和感に気づいた。これだけのアナウンスをやっているのに女性店員の周りには彼女と俺を除き誰も集まってはいないのだ。そして周辺には何らかの異変が起こった様子もない。なのになぜ彼女はこんなにも顔を青くして震えているのだろう。

『お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？』

前髪をぱつぱつと切った女性店員の佇まいはどこか人間味が薄く、まるでロボットのようだ。

「――私」

蒼白の彼女がようやく唇を開いた。ようやく俺は恐ろしくなってきた。

「私、\*+=%\$から来た「¥です」

彼女がそう呟いた途端、前髪ぱつりの店員が強烈な反応を示した。

「\*+=%\$の？ では間違いなく\_\_\_\_\_ですね」

この店員は相変わらず何を言っているのかが分からない。しかしなぜ彼女の言葉さえも俺は理解できないのだろう。

「……お前ら何やってんだよ」

悲鳴に似た声を上げた俺を二人は一瞥すると、

「¥、こっちへ」

「%" =～」

完全に無視した。彼女は店員の案内に従いカウンターへ入るとショウケースから大皿を引き出す。

「……まさか」

一瞬俺の理解できる日本語を発した彼女だったが店員が何事かを吹き込むと火が着いたように泣き始めた。

「' &▲○まで！ ;) ¥!の%\$\$\$！」

もう何を言っているのか全然分からない。彼女は大皿を前に膝から崩れ落ちた。

「おい、このサラダが何だって言うんだよ」

大皿に盛られていたのはどこにでもあるただの海鮮サラダだった。マヨネーズベースと思われる白いドレッシングが艶かしく光っていて思わず唾が込みあげてくる。

「%\$\$\$！」

店員が俺の理解できない事を叫んで睨んだ。背中に悪寒が走る。殺気というものがあるとしたら恐らくこういうものを言うのだろう。

「ねえ」

ショウケースの前でしゃがみこんでいた彼女がゆっくりと立ち上がる。蒼白と思われた顔は更に白くなっていた。

「それおいしそうに見える？」

俺の目を見た。彼女の目は金色に光っていた。比喻ではなく、本当に光っていたのだ。

「いや、全然……」

とっさにそう言った。ウマそうだとさえ殺されると思ったからだ。ずっと俺の表情を伺っていた彼女に瞳の金色の光が、ふっと消えた。そして彼女は息を吸い込んだ。

「嘘つき」

それだけ言い残すと前髪ぱつりの店員とともに彼女はぺらぺらと音を立てて消えた。

俺の前に残されたのは大皿の海鮮サラダ。そして店員と彼女、二人分の『皮』だった。

白いドレッシングは予想どおりマヨネーズベースだった。野菜はしゃきしゃきしていてエビはぷりぷり、くらげの歯ごたえも堪らない。やっぱり舌は嘘をつけない。

その夜俺は消えた彼女の事を思いながら海鮮サラダを食べていた。食べれば今日あった事を全部忘れられると思っていたが、そのうち塩味がきつくなってきて俺はトイレにかけこみ食べたものを全部吐いた。

終

投稿時刻 : 2013.02.16 23:21

最終更新 : 2013.02.16 23:29

獲得☆ 3.235

《Twitter バズ賞》  
お客様の中にイケダハヤトはいらっしゃいませんか  
代々木犬助

「お客様の中にイケダハヤトはいらっしゃいませんか」

フライトアテンダントがそうアナウンスしたとき、僕はそんな馬鹿なと座席からずり落ちそうになった。でもそれは比喻である。僕が本当に座席からずり落ちたのはそのあと。僕をのぞくみんなが挙手したからだった。お客様の中に、イケダハヤトが、いるかだって？ ぱーどうん？

機体の中央あたりにある大きなテレビモニターの前に座っていた男が立ち上がり、乗客のほうに向き直って言った。

「私がイケダハヤトです。ついさっき聞きかじったばかりのことを、さも自分が思いついたかのように人に話します」

窓側の席の男がそれに異をとらえた。

「いや私こそイケダハヤトです。個性的であろうとして、場の空気にあわせて奇抜なことを言い続けた結果、論旨に整合性がなくなりました」

すると私のとなりの座席の男が、目をきよろきよろさせながら落ち着かない様子で言った。

「コミュニケーションはコストです。経済的に低コストな暮らしが注目を浴びる時代がきたように、低コストな人づきあいも賞賛される時代もまもなくやってくるでしょう。こうやって人前で話すことはできれば避けたいと思って生きてきましたが、お困りの方がいるようなので挙手させていただきました。私がイケダハヤトです」

乗客たちは次々とイケダハヤトを名乗った。あいつも、こいつも。この飛行機で一体何が起こっているのか僕には全然わからなかったが、ひとしきり自己紹介が終わったあとに、機内放送で機長からの説明があった。

「乗客のみなさま、ご協力ありがとうございました。みなさまのイケダハヤトのおかげで、いま、ひとりの乗客の命が救われました。その乗客はさきほど、自分が希代の人物だと勘違いしその傲慢さに無自覚であるひとりの男のことがどうにも我慢できなくなり、発作を起こされました。しかし、みなさまの中にいらっ

しゃるイケダハヤトのおかげで、現在は安静を取り戻しました。みなさまのご協力に、心よりお礼申し上げます」

僕は、乗客達の胸くそ悪い告白を聞きながら、自分はそんなに愚かではないさと半ば無視を決め込んでいたのだが、その間違いにいまやっと気付いて挙手をした。

飲みものやブランケットを求めているのかと思って音もなく僕の座席のところまでご用聞きにやってきたフライトアテンダントに僕はいった。

「僕が、本当の、イケダハヤトです」

(おわり)

## 隕石

丁史ういな

「お客様の中に隕石はいらっしゃいませんか」

宇宙生命体が乗客を見渡す。

「私だ」乗客の中で、ごつごつした体をした生命体は名乗りあげた。

\* \* \*

国際宇宙ステーションN 04 施設——その重力調整の施された一室で、日野サトシは映像を一心に見つめていた。その映像は、つい数分前に地球から送信されたものである。送信元は第五象限——ロシアのあたりか。民間人が自身の携帯機器で撮影したものらしく、画質は悪い。しかしサトシは、食い入るように幾度も映像を再生した。

「こんなことがあったとは……」サトシは知らぬ間に一人の空間で呟いていた。

サトシは映像を記録媒体に保存し、自室を出て、オフィスへ向かった。数人の同僚が時間外にやってきたサトシに視線をやる。「サトシ、おまえ今日は非番じゃないのか」内の一人が訊ねるが、サトシはそれには答えず、記録媒体を自身の仕事用コンピュータに接続した。

「みんな、これを見てくれ」

映像が再生される。平凡な日常のさなか、突如訪れる閃光——。そして轟音。低空を燃える物体が駆ける。

「これは、一体どういうことだ」

「隕石かしら」

同僚たちも知らなかったようで、口々に感想を言い合っていた。

「でも、隕石の報告なんてあったか？」

「そうだ。それが不思議なんだ」

宇宙ステーションは数日かけて地球を一周する。それはN 04 施設に限った話ではなく、地球を大気圏外から観測する多くの人工衛星すべてにあてはまることだ。そのどれかが、隕石などを発見した場合、どれほど些細なことであっても報告する義務となっている。報告はすべての人工衛星ならびに地球の各宇宙局に平等に配信される。

「そうね。今日は、地球に衝突するほどの大きさは報告されなかったわ」

「どこかの測定ミスだろうか」

「まさか。そんなことありえない」

\* \* \*

「お客様。次の駅がお客様の着点となります」

宇宙生命体の言葉に、隕石は「おうよ」と自信げに応じた。

乗船の搭乗口の一部がオミットされ、虚数空間が生成された。そこへ、超光速粒子が垂れ流される。

\* \* \*

サトシはロシアの宇宙局に連絡し、現地の様子を確認した。現在向こうは混乱状態にあるらしく、連絡はつながりにくかった。やっとながりに、話を聞いてみるに、隕石が落ちた一带は惨憺たる状況で、一九〇八年のツングースカ大爆発や、二〇一三年のチェリャビンスクの件を思い起こすものらしい。事前の報告はなかったのかと問うと、通信相手はなかったと苛立たしげに答えた。もしかしたらサトシたちが仕事を怠ったせいだと思われるのかもしれない。

「しかし不思議だ。隕石はどこからやってきたのだ。すべての観測機をすり抜けたとは、到底思えないが」

「もしかして、隕石ではなくてスペースデブリだったのかも」

「どちらにしたって、ゴミが地球の引力に負けたときは報告が入るさ」

「怖いわ……」

サトシは自分が冷や汗をかいていることに気付いた。水滴を拭う。

\* \* \*

隕石は宇宙生命体にチップを渡し、虚数空間へと入っていった。隕石はその寒さに思わず身震いした。物質の質量が虚数になっているため、分子の動きも虚数的になり、ゼロケルビンを下回る温度が生み出されているらしい。

「ありがとうございました。またのご乗車をお待ちしています」

宇宙生命体の言葉を背に、隕石は過去へと降り立った。

\* \* \*

「ツングースカ大爆発の再来か」

サトシは呟いた。同僚が、その言葉を汲み取る。

「なに言ってるの。ツングースカのは、隕石かどうかも分からないじゃない。類似点は少ないわ」

「いや……。おれにも分からないが、その気味の悪さが、とても似ていると言ったんだ……」

「UFOだ」途端、閃いたように他の同僚が口走った。「これはUFOの——宇宙人の仕業に違いない」

「そんな、きみ……。いくら分からないからといって、そんな児童文学のような発想に逃げないでくれないか。これは異常事態なのだよ」サトシは嗜めた。

「いいえ。あながち、間違っていないのかもしれない」しかしもう一人の同僚も、賛同し始めた。サトシは頭を抱える。

「わけがわからない！」



\* \* \*

「なあ、嬢ちゃん」

乗客の一人であるブラックホールが、宇宙生命体に話しかけた。

「はい、なんですか」

「やけに可愛い顔をしてるが、嬢ちゃん、生まれはどこなんだい」どうやらナンパのつもりらしい。

宇宙生命体は、ブラックホールごときが、と心中で毒づきながら――。

「生粋の地球人ですよ」と可愛らしい声を出して答えた。

船は今日も動く。

《最速&最多記録更新で賞》  
お客様の中に  
ひやとい

「お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんか」

「いません」

「ではマッサージ師の方は」

「いません」

「では看護師の方は」

「いません」

「じゃあいったい、どの職業の方がいらっしゃるのですか？」

「ここは、いわゆる小説愛好家しかいませんよ」

「なんたっててきすとぼいだもんね」

## 無念じゃ…

やぐちけいこ

「お客様の中に白旗を上げた方はいらっしゃいますか？」  
満面の笑みを浮かべながら彼女が聞いている。

「は～い…」

私は悔し涙を流しながら手をあげた。

私は指定時間を過ぎ慌てて今回のお題を見て絶句。  
一瞬にして頭が真っ白になるという貴重な経験をした。  
そうか、そう来ましたか。

チチチチッ

チクタクチクタクチクタク

いくら考えても何も浮かばないまま時間だけが過ぎた。

時間だけが過ぎた。

過ぎて行くのは時間だけ。

こう言う時だけ何故時間が過ぎるのが早いんだろう？

「……………」

「…………っ ……………っ」

「…………っ ……………っ ……………汗」

そして何も思い浮かばないまま無情のタイムアップ。

完全に私の負けだ。

もともと敵うはずが無かったのだ。

分かりきっていたことではないか。

それでも無念じゃ…。

投稿時刻 : 2013.02.16 22:56

最終更新 : 2013.02.16 23:01

獲得☆ 2.667

夢  
ひやとい

「お客様の中にキモベツ社中はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中に昨日、悲別で。はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中にきみはちびいくつかな？と尋ねるせんだみつおはいらっしゃいませんか？」

「お客様の中に亭主元気で留守がいい方はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中にメンヘラ女子をナンパしてやっちゃおうって方はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中に最強を求める厨二病の方はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中に根拠のない自信を持っている方はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中にレスリングを除外したい方はいらっしゃいませんか？」

「お客様の中にガンバの冒険を見てイカサマを好きになった方はいらっしゃいませんか？」

お客様の中に……

お客様の中に……

……

そこで俺は目を覚ました。悪夢だった。

女子高生に周り囲まれるのはいいが、質問攻めにされるのは楽しくはない。

と、周りを見渡すと、今度は女子大生に取り囲まれていた。

ピー  
しゃん

「お客様の中に、スケベな人はいらっしゃいませんか」

と、議長が言った。

「今なら有名ピーが、あなたのピーなところをピーして、さらにピーなことまでできるピーな会にご招待しますよー」

と、副議長が言った。

「さあ、あっちの人もこっちの人も、この料亭では無礼講です。10年一度の大サービスですよー」

と、議長がまた言った。

その翌日のことである。

新聞には、「消費税 20 % 満場一致で可決」という記事が大々的に告げられていたが、

一体何が起きたのかは国民の知るところではない。

真相はピーの中である。

ごめんなさい  
ひやとい

「お客様の中に貴様という方はいらっしゃいませんか」

「俺だけ、何か」

「中山という方からお電話が入っているのですが」

呼び出し電話のようだ。

ケータイにかければいいのと思いながら店の電話をとった。

「もしもしどうした？」

「ああごめんな、お前に連絡しようと思ったんだけどケータイ忘れちゃって、ここにいるんじゃないかと思ってかけたんだ」

なるほど。そういうことか。

「そうか。で、用件はなんだ？」

ここまで書いてたら長くなりそうでめんどくさくなったので、書くのをやめた。

読んでくれた人にはごめんなさい。

## AKB

工藤伸一@ワサラー団

「お客様の中に AKB のメンバーはいらっしゃいませんか」

飛行機での尋ね人といえば「お医者さま」が定番だと思い込んでいたが、何せ乗るのは久しぶりだから実際にはそうではないのかもしれない。とはいえ AKB のメンバーを探さなくてはいけない状況とは一体、何が起きているのか。

座席を離れアナウンスしていたキャビンアテンダントのもとへ伺い「どうして AKB のメンバーが必要なんですか」と質問を浴びせてみたところ「お客様は AKB のメンバーですよ。だったら助けて下さい」などと切り返してきたので、どうしてバレたんだろうと怯みつつも平静を装って「もしそうだったとしても理由が分からなければ名乗れませんよ」と答えたところ、今度は「見れば分かりますよね、この惨劇を」などと倒置法の修辞で畳みかけてきたものだから、ファーストガンダム世代の僕は嬉しくなって思わずシャアの名言「認めたくないものだな。自分自身の、若さ故の過ちというものを」をそのままパクって伝えてみたら、案の定 CA はアニメの知識が不足しているらしく「何のことか分かりませんが、とにかく助けてくれませんか」とテンパった調子で僕に縋りついてきたので、仕方なく何が起きているのか目視で判断することとなった。

いま CA の側に座っているのは、緑色の身体から手足が 48 本も伸びているのみならず、顔面には目鼻口どれを数えても 48 個ある異形の生物であり、どうみても人間には思えないから、体調を崩しているのだとしても人間と同じような方法では助けようがないことが判明した。なるほどそれで「お医者さま」ではなく「AKB のメンバー」でなくてはならなかったのだ。しかし気がかりな点は他にもあるので、ちゃんと確かめておかなければならない。

「それにしても何故、男の僕が AKB のメンバーだと分かったんですか」

「だって AKB のティーシャツを着てるじゃありませんか」

「それで判断できるなら AKB ヲタクは皆メンバーってことになりますよ」

「そんなはずはありません。だってお客様の着ているティーシャツはメンバーしか着られない特別なものですよ」



「そこまで知られているのなら、もはや白状するしかない。ご指摘の通り僕は AKB のメンバーです」

「しかもネ申セブンの一員ですよ」

「お詳しいですね。いやはや驚きました。確かに僕は AKB 男組のセンターを務めています」

「だったら早く何とかして下さいませんか」

「そうしたいところですが、異形の生物を助けられる能力なんぞ持ち合わせておりません」

「異形の生物ではありません。ついさっきまでは普通の人間のなりでした」

「つまりその方が急に变身してしまったわけですね」

「ですから AKB でないと対処できないんです。客室乗務員のマニュアルにも書かれています」

「ならば断るわけにいきません。まず先に僕がツイートしますから、それを読んで下さい」

「当機ではネットの利用を禁止しておりますので、ツイートはやめてください」

「それならエアツイートにしておきましょう。今から手書きで書きます」

AKB ティーシャツの上に羽織っていたジャケットの胸ポケットから手帳と万年筆を取り出し、一気呵成に書き上げて CA に手渡した。「さあ声に出して読んで下さい」

☆

「書くことは生きることだ」って誰の言葉だったかな。「書くのが下手なら書かない方が良い」なんてのは「生きるのが下手なら生きない方が良い」と言ってるのと同じだ。相手が誰だろうと、そんな説教をされる筋合いではない。

☆

それを聞くなり機内の客がどよめき始めた。予想していたことではあったものの、その殆どがブーイングだったので、僕は落胆した。しかも CA はその反応を受けて恨みがましい目つきでこちらを睨んでいる。

「これは僕のせいではありません。貴女の読み方が下手なんです」

「下手なら書かない方が良いという意見を批判しておきながら、下手なら読むなと仰るんですか」

「それとこれとは話が違います。だって貴女は僕の正体を知っているのですから」

「どういうことですか」

「こういうことです」

吐き捨てるようにそう言うなり、ジャケットもティーシャツもジーパンもボクサーパンツも全て脱ぎ捨てて産まれたままの姿を曝け出し、腰に両手をあてて股間のイチモツの先端を舐めるとばかりに CA の唇に押し当てた。CA のディープスロートによって跳び出した白濁汁は異形と化していた客の体中に飛び散り、千手観音のように伸びていた手足を溶かし、爬虫類めいた肌の色や増殖していた目鼻口も次第に変化して、人間の姿に戻った。なお仕事を終えるまでに五回も射精をする必要があったため、僕はすっかり疲れ果てて「こんなことをしている場合ではない」と賢者タイムに陥った。

「どこのどなたか存じませんが、助けてくれてありがとうございます」人間に戻った姿はまるで本物の AKB メンバーそっくりだったので訝しく感じていると CA は「そうなんです。このお客さまは貴方の推しメン

だったのです」「だったら最初から言ってくれば良かったのに」「それはプライバシーの侵害に当たりますので無理でした」「まあしかしこれで本物のAKBの未来は明るくなったわけですね」「その通りでございます」CAと推しメンの二人は、すっかり菱び果てた僕のジュニアを愛おしげに愛撫しながら、安堵の涙を流し続けた。

まあそんなわけで僕は久々のフライトによって日本の至宝を救えたようだ。なお「AKB 男版」などというアイドルグループは存在しない。僕が属している組織は「諦めることなく・書き続ける・馬鹿たち」の頭文字をとって「AKB」なだけなので、本物のアイドルがそれを知ってるはずもないし、ましてや何の関わりもなかったCAに見抜かれる可能性も考えられなかったものだから、今回の珍事を持ってして僕らの知名度が少しでも上がってくれたなら幸いである。

それにしてもどうして本物のAKBメンバーがあのような大惨事に見舞われたのか。故郷の空港に到着後、件のCAに誘われて待ち合わせたレストランで問い質してみると、実はあの機内にはAKB関係者しか乗っていなかったというのだから、本物のAKBメンバーではない僕が同乗していたのは、何とも素晴らしい偶然だったことになる。精力のつく亜鉛を多く含むカキフライを食べたおかげで僕のギャランドゥーは復活。CAとの激しい夜を共にすることとなったのは言うまでもない。何て下らないものを書いてしまったのか情けなくなるけれど、だからこそ僕はこれから先どんな困難に阻まれようとも「諦めることなく・書き続ける・馬鹿たち=AKB」で今後もいられる自信がついた。(了)

投稿時刻 : 2013.02.16 23:59

獲得☆ 3.615

※制限時間後に投稿

## 見知らぬブランドの炭酸水

### 肉まん大王

「お客様の中に船外活動経験者はいらっしゃいませんか」

「およそ 15 分から 30 分程度の短時間の作業です」

「お客様の中に船外活動経験者はいらっしゃいませんか」

「作業内容は 3 ステップです。ステップ 1、本船後部ハッチから船尾方向 7 メートルにある損傷箇所への移動および被害状況の目視確認。ステップ 2、・・・」

何名かのフライトアテンダントが客席通路を行き交いながら呼びかけている。  
先ほどの機長のアナウンスどおり、この船はあまり良くない状況に置かれているらしい。

惑星間定期便の路線上に、小惑星が浮遊しているのは稀ではない。  
通常は外壁のシールドが衝突を回避してくれるが、たまにシールドをすり抜ける材質の小惑星がある。  
それらは事前にレーダーで確認して避けられるのだが、今回は運悪くレーダーを掻い潜ってきた奴がいたのだ。

この船（地球衛星軌道上にある銀河空港の、64 番デッキ、あまり便数のおおくない路線用の、ちょっと寂れた雰囲気のある搭乗口から出発した、金星行き AWA312 号）は、乗客もまばらな田舎路線だ。

乗客は、金星鉱山で働くわずかな技師とその家族、  
それにボランティア精神旺盛な医者（私）くらいのものだ。  
船外での補修技術を習得しているとなれば、  
航空関係者か軍関係者のどちらかだろうが、この船には乗っていそうにない。

わざわざ金星観光しようという物好きの富裕層なら  
船外活動にもつかえるアバターシステムを携帯していそうだが、  
そういう層は惑星定期便など使わないだろう。

それにしても、常任の船外活動者が乗っていないほどの田舎っぷりには恐れいった。  
あれほど賑わった金星鉱脈も、もう昔話ということか。

「お客様の中に船外活動可能な方はいらっしゃいませんか」

「およそ 15 分から 30 分程度の短時間の作業です」

「お客様の中に船外活動可能な方はいらっしゃいませんか」

「作業内容は 3 ステップです。ステップ 1、本船後部ハッチから船尾方向 7 メートルにある損傷箇所への移動および被害状況の目視確認。ステップ 2、・・・」

「あの・・・」

と私はアテンダントの一人に声をかけた。

「はい！ お客様は船外活動経験者でいらっしゃいますか・・・」

と、ぱっと輝くような笑顔をむけて応えた彼女をがっかりさせたのは残念だったが、  
そうではない旨を告げて、炭酸水（地球のペリエを希望したが無かったので、見知らぬブランドのもの）を  
持ってきてもらった。

よく冷えた炭酸水をふた口飲み、ようやく一息ついた。

すでに船内の気温は 10℃ほど上がり、乗客のまばらな客室もさすがにざわついてきて、  
なかには大声で怒鳴るものもでてきた。

まあ、おそらく時間切れであろう。

私は子供の頃に連れていってもらった月面サウナも

こんなふうにならなくていいなあ。などと思いつつながら

見知らぬブランドの炭酸水を一口含んで、もうしばらくうとうとすることにした。

## 同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

---

今回、書き出し「お客様の中に\_\_\_\_\_はいらっしゃいませんか」のお題で、Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。

第二回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/457545>

また、制限時間超えなどの理由で投稿はされなかったものの、同じお題を使って書かれた作品がございましたので、ここにご紹介いたします。

「道化の告白」 永坂暖日さん

<http://musojoy.blog25.fc2.com/blog-entry-256.html>

よろしければ、これらの作品もあわせてお楽しみください。

※他にもございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

## 終わりに

---

第二回てきすとぼい杯、今回は、第一回にもまして、力作・良作の集まったハイレベルな戦いだったのではないのでしょうか。

わずか1時間+15分の即興小説であるにもかかわらず、その制約を感じさせない、完成度の高い、技術と個性と工夫を併せ持った作品がとても多かったように思います。

事実、審査でも、特に上位はかなりの接戦となりました。

また、今回も、お題を予想外の発想で作品に取り入れた方がいらしたと、さらにはてきすとぼいを題材にしてくださった方が何人かいらしたというのも、運営する側としては嬉しいことでした。

てきすとぼいは、第二回てきすとぼい杯の開催日でもあった2月16日に、ドメイン“text-poi.net”取得／サーバ稼働一周年を、無事、迎えることができました。

そのため、今回のてきすとぼい杯は、副題的に「てきすとぼい始動一周年記念」とさせていただいたのですが……第一回に続き、多くの、魅力的で個性的な作品をお寄せいただきまして、本当に、感謝の言葉ありません。てきすとぼいは、なんて幸運で幸せなサイトなのだろう、と感じております。

そのてきすとぼい、まだまだ見辛く操作し辛い所の多いサイトではございますが、これからも少しずつ、機能を充実させてまいりたいと思っております。

どうか次の一年も、てきすとぼいをよろしく願いいたします。

2013年2月28日  
てきすとぼい杯 運営担当

てきすとぽい杯作品集  
〈第2回〉

<http://p.booklog.jp/book/67286>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67286>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67286>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとぼい杯